

不登校支援訪問看護師養成講座：第 1 回「“不登校現象”の理解」

1. 全 6 回の講座開講と学びの方向性

「訪問看護師のための不登校支援～スキルアップ養成講座～」の第 1 回が開講した。

冒頭では、全 6 回にわたって不登校支援を体系的に学ぶ訪問看護師向けの講座は全国的にもまだ珍しく、宮崎から新たな不登校支援のモデルをつくっていく可能性について期待が示された。

本講座では、単に不登校への対応技術を身につけるだけではなく、訪問看護師が子どもと家族にどのように寄り添い、どのような視点で支援を組み立てるのかを考えながら、6 回を通して支援力を高めていくことを目指す。

また、受講者はそれぞれ異なる訪問看護事業所から参加しているため、同じ志を持つ仲間としてつながり、宮崎県内で不登校支援に取り組む訪問看護師同士のネットワークを形成していくことも、本講座の重要な目的として位置付けられた。

全 6 回の出席を修了条件とし、修了者には法人から修了証を交付する予定であることも共有された。

2. 「教えてもらおう研修」から「共に考える研修」へ

本講座では、講師から一方的に知識を学ぶ形式ではなく、参加者自身が考え、語り、他者の考えから学ぶことを重視している。

そのため、毎回グループを組み替え、異なる事業所の参加者同士が交流できる仕組みを取り入れる。

第 1 回では、自己紹介、名刺交換、事業所紹介などを行い、参加者同士が顔の見える関係をつくるところからスタートした。

また、研修は対面でのグループワークを基本とし、参加者が安心して率直な意見や現場での悩みを話せる環境づくりも重視された。

これは、単に知識を得る研修ではなく、それぞれの現場での経験や疑問を持ち寄り、参加者同士で支援を考える場として講座を位置付けているためである。

3. 自分自身の現在地を知る「自己分析」

講座の初めには、不登校支援に関する自分自身の現在の知識・力量、現場で困っていること、これから学びたいことを整理する自己分析シートに取り組んだ。

ここでは、「何を知っているか」だけでなく、「何が分からないのか」「何に困っているのか」を自覚することが重要であると説明された。

支援者が自分自身の現在地を把握することで、これから 6 回の講座を通して何を学び、どのように支援力を高めていくのかを意識することにつながる。

また、レポートやアンケートを通して参加者の理解度や疑問、今後学びたい内容を把握し、次回以降の講座内容の改善にもつなげていくことが説明された。

4. 小学5年生 A 君の事例から「支援を考える」

続いて、訪問看護導入初期にある小学5年生 A 君の事例が提示された。

A 君には、

- ・ 欠席の増加
- ・ 朝の腹痛
- ・ 登校を促された際の泣き
- ・ 家庭でのゲーム利用
- ・ 自発的な会話の少なさ
- ・ 学習の遅れへの懸念
- ・ 母親の強い不安
- ・ 父親の関与の少なさ

などがみられている。

一方で、動画編集やイラスト制作への関心があり、オンライン上の趣味の仲間との交流もあることが把握されている。

この事例について、参加者は「自分ならどのような支援を考えるか」を個別に書き出した。

ここで重要なのは、A 君を「学校に行けていない子ども」としてだけ見るのではなく、現在の生活、興味・関心、人とのつながり、家族の状況などを含めて、一人の子どもとして捉えることである。

5. 「不登校とは何か」を問い直す

その後、文部科学省における不登校の定義を確認した。

不登校は、心理的、情緒的、身体的、社会的要因などにより、児童生徒が登校しない、または登校したくてもできない状態にあり、年間 30 日以上欠席した場合を一つの基準として把握される。

ただし、病気や経済的理由による欠席はこの定義から除かれる。

ここで示された重要な視点は、「30 日以上欠席しているか」という基準だけで子どもの状態を理解しないことである。

参加者には、

「学校に登校することには、どのような意味があるのか」

「学校に行かないことは、その子どもにとって何を意味しているのか」

という問いが投げかけられ、グループで議論を行った。

参加者からは、学校は単に勉強をする場所ではなく、友人との関係や集団への参加、社会性を学ぶ場でもあること、また生活リズムを維持する場としての役割もあることなど、さまざまな意見が出された。

6. 「登校」ではなく「学び」と「つながり」に目を向ける

議論を通して、学校には学習機会だけではなく、

- ・ 人と関わる
- ・ 集団の中で経験する
- ・ 安心して過ごせる場所を持つ

- ・ 多様な人との関係を経験する
- ・ 社会生活に必要な力を身につける

といった役割があることを整理した。

そのため、不登校支援では「学校に戻れるか、戻れないか」だけを見るのではなく、その子どもが現在、学びを継続できているのか、人とのつながりを持っているのか、安心できる居場所があるのかという視点から生活全体を捉えることが重要になる。

保健室登校、フリースクール、オンラインによる学習や交流なども、子どもの「学び」や「つながり」を保障する一つの選択肢として捉えることができる。つまり、不登校支援において大切なのは、単純に「登校できるようにすること」ではなく、子どもの学びと育ち、そして社会とのつながりをどのように保障していくかを考えることである。

7. COCOLO プランから考える「不登校支援」

こうした考え方を整理する上で、文部科学省の「COCOLO プラン」が紹介された。

COCOLO プランでは、不登校対策において、子どもたちの「学び」「安心」「つながり」を社会全体で保障していく方向性が示されている。

その中には、

- ・ 多様な学びの場の確保
- ・ 子どもの心身の変化や小さなリスクの早期把握
- ・ 学校内におけるチームによる支援
- ・ 子どもが安心して過ごせる学校風土の形成
- ・ 学校や関係機関による連携

などの視点が含まれている。

本講座では、こうした国の方向性も踏まえながら、訪問看護師が不登校支援にどのような役割を果たすことができるのかを考えていく。

8. この講座が大切にする「支援の土台」

第1回前半で特に重要だったのは、不登校支援の技術を学ぶ前に、「私たちは子どもをどう見るのか」を考えることである。

本講座は、単なる「不登校児への対応技術」を学ぶ研修ではない。

子どもの学ぶ権利、育つ権利をどのように保障するのか。

子どもと家族をどのような存在として捉えるのか。

訪問看護師は、医療的支援だけではなく、生活、人とのつながり、家族、地域社会との関係をどのように支えていくのか。

こうした問いを出発点として、

人間観

教育観

健康観

家族観

地域・社会資源観

など、支援者自身の「支援の土台」を問い直し、その上に具体的な支援技術や根拠に基づく実践を積み重ねていくことが、本講座の基本的な考え方として示された。

第1回前半は、こうして「不登校とは何か」だけではなく、「子どもにとっての学びとは何か」「学校とは何か」「支援とは何か」そして「訪問看護師は何を支えるのか」を考える時間となった。

この視点を土台として、後半では、より具体的な不登校の理解と支援について学んでいくことになる。



今回、積極的に参加して頂いた訪問看護ステーションを紹介します。
県北は延岡市、県西は小林市など県内各地からの参加でした。

#訪問看護ステーション CURA 都城、#訪問看護ステーション虹 Life、#訪問看護ステーション翼、#訪問看護ステーションライド、#訪問看護ステーション紬、#訪問看護ステーションはまゆり、#訪問看護ステーションラポール、#SOU 訪問看護ステーション宮崎、#訪問看護ステーションオリーブ、#訪問看護ステーションCalm 日向、#訪問看護ステーションコルディアール宮崎、#ユーカリ訪問看護ステーション miyazaki、#訪問看護ステーションぱりおん、#訪問看護ステーションベスト、#訪問看護ステーションかえるのほっぺ
その他に、保健師、子供支援者、宮崎市議、県看護協会などからの参加者。

